

# 内 科 学 (3)

助 教 授 井 上 恭 一

## 1. 研究概要

主たる研究テーマ

- ①アルコール性肝障害の臨床病理学的研究
- ②B型肝炎ウイルスの本態に関する研究
- ③薬剤性肝障害の起因薬剤の同定に関する研究

内科学第3講座は主として消化器疾患および糖尿病をはじめとする代謝性疾患を担当するが、現時点では肝疾患について組織形態学を基礎として研究を行っている。

アルコール性肝障害については最近国民1人当りのエタノール消費量の増加とともに肝障害の発現頻度が高くなり、アルコール性肝障害は社会的にも大きな問題となってきた。また本邦におけるアルコール性肝障害は欧米諸国のそれとは異った特徴がみられ、その理由としてエタノール摂取量の相違、飲酒時における副食摂取状況、B型肝炎ウイルス(HBV)の関与などが考えられている。これらの点を明らかにする目的で、アルコール性肝障害患者の飲酒歴、飲酒状況を調査するとともに、HBVについては患者血清中のHBs抗原・抗体、HBc抗原・抗体、HBe抗原・抗体を検索し、HBs抗原添加マクロファージ遊走阻止試験を行って、アルコール性肝障害におけるHBVの関与を知ることが出来た。

上述の如く、アルコール性肝障害のみならず、我國の肝疾患ではHBVの関与する割合が、極めて高いが、HBVそのものの本態についてはなお不明の点が多い。現在もっとも関心をもたれているのはHBVの増殖過程およびその感染性の問題であるが、これらについてはHBs抗原キャリアの肝組織の電子顕微鏡的観察や、HBs抗原陽性疾患患者血清中のHBe抗原あるいはウイルス増殖に関係が深いと思われるDNA Polymerase 活性の検索を行うことにより明らかにされつつある。

薬剤性肝障害については新薬の開発とともに従来考えられなかったタイプの肝障害も出現して来おり、これらの機序を解明することは社会的な要請でもある。従来より薬剤性肝障害の起因薬剤の同定にはリンパ球培養試験がもっとも頻用されるが、教室ではこれらの中で、マクロファージ遊走阻止試験を施行し、その起因薬剤の同定を行っている。

## 2. 学会発表

- 1) 井上恭一、稲垣威彦：薬剤性肝障害、第11回日本肝臓学会東部会、シンポジウムⅠ 肝障害の評価、51、10、札幌。
- 2) 井上恭一：アルコール性肝障害の臨床、第63回日本消化器病学会総会、シンポジウムⅤ アルコールと消化器疾患、52、4、東京。
- 3) 井上恭一、上村朝輝：びまん性疾患における肝の腹腔鏡所見と組織病変の対比、第19回日本消化器内視鏡学会総会（シンポジウムⅢ 腹腔鏡診断の進歩）52、5、東京。

## 3. 刊行論文・著書等

- 1) 井上恭一、佐々木博、市田文弘：アルコール性肝障害、組織学的にみられた帯状、亜広範性壊死の意義について、第8回犬山シンポジウムの記録94頁、1977。
- 2) 市田文弘、井上恭一：肝臓病—その基本的考え方、治療 59:1687、1977。
- 3) 井上恭一：アルコール性肝障害の臨床、日本医事新報 2784:7、1977。
- 4) 井上恭一、稲垣威彦：薬剤性肝障害、肝臓 18:585、1977。
- 5) Inoue, K.: The clinicopathological features of the alcoholic liver injury in Japan and its etiological relationship to hepatitis B virus. Gastroenterologia Japonica 12:230、1977。